

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520559

研究課題名(和文) アスペクトとしての移動補助動詞と完了助動詞に関する共時的・通時的研究

研究課題名(英文) A research about movement verb and perfect auxiliary as aspect in synchronical and diachronical perspective

研究代表者

福沢 将樹 (HUKUZAWA, Masaki)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：30336664

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円、(間接経費) 270,000円

研究成果の概要(和文)：これまでの日本語アスペクト研究において、「物語時」「表現時」という理論の不十分なこと、韻文資料についての扱いが不十分なこと、「虚構」のテキストの取り扱いに関する理論の不十分なことが明らかになった。

について例えば現代詩歌において「～てゆく」という表記は散文同様「～ていく」に比べてきわめて稀だが、流行歌の歌詞においては思いのほか「～てゆく」が多用されていることがわかった。については「仮託」と「扮装」の区別を提唱した。

研究成果の概要(英文)：In recent researches about Aspect of Japanese language, I have clarified that, 1st, it is insufficient for the theory that has two different time-lines, "Story-Time" and "Expression-Time". 2nd, it is insufficient for verse data. 3rd, it is insufficient for the theories of "fictional" texts. On the 2nd point, I have discovered that an aspectual expression, '-te yuku', is not unusual on the words of popular songs; usually, it is rare on modern verses. On the 3rd point, I have declared the necessity of the distinction between "Pretending" and "Personating".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：アスペクト 補助動詞 複合語 又 韻文

### 1. 研究開始当初の背景

古代日本語アスペクトの研究は、明治から昭和初期には総合的・体系的な記述がなされていたものの、1960～1980年代は助動詞の意味・用法を一つ一つ個別に記述する傾向があった。しかし近年はそれだけにとどまらず、再び言語体系全体の中でどういう体系をなしているか、あるいは時代間の比較対照、という観点で記述が大きく進んできたところであった。

しかしその参考となる現代日本語アスペクトの研究においては「アスペクト」の典型的な形式が「～ている」など状態性の述語に偏っていた。また英語も be, have など同様であった。古代日本語アスペクトを論じるに当たり、現代語や英語などを参考にすればかりではこうした限界があった。そこで動作性の述語に由来するアスペクト形式にもっと目を向ける必要があった。特に「来」「行く」のように「移動」ないし「推移」を表す補助動詞に目を向ける。古代日本語の他にはフランス語の aller, venir も参考になると思うられた。

そしてそれは述語の表す「限界性」に深く関わることが予想された。

これらのことは、当時は中心的なものとして意識しなかったが、自立語が「文文化」して付属語・接辞化する現象の一環であり、またそれは「句の包摂」現象とも深く関わり、語構成論の問題でもあった。

### 2. 研究の目的

リ・タリなどの状態系アスペクトとは別に「推移系アスペクト」の概念を立てる。ヌ・ツは古代語の推移系アスペクトとして代表的なものである。

古代語においては補助動詞よりも助動詞が優勢な言語であり、現代語においては助動詞ツ・ヌの代わりに補助動詞テクル・テイクが優勢な言語類型であることを論じる。推移系アスペクトが限界性と読み替えられる歴史的变化を被ったことを明らかにする。即ち、ある時期までは推移アスペクトが主でそれが付随的に限界性を匂わせる形式であったものが、ある時期からは限界性の方が中心的機能になって付随的に推移アスペクトを匂わせる形式へとスライドしたことを明らかにする。

併せて「限界性」の点でも古代語と現代語が異なる言語類型であり、古代語は「限界性の希薄な言語類型」であって現代語は「限界性の優越する言語類型」であることを論じる。

### 3. 研究の方法

(1)ヌが月日・時刻・天体の推移を表して日時転換・場面転換を示す用法を収集・整理し、「来」「行く」が同様の働きを示す用法と比較する。両者の間でどのような役割分担があるかについて論じる。

(2)ヌ・ツが未来時や一般法則を表す用法を

収集・整理し、「来」「行く」が同様の働きを示す用法と比較する。この変化は無標アスペクト形式が未来を表すようになる変化と併せて考察し、その発展の時期と比較することとなる。

(3)「限界性」の解釈と「推移過程」の解釈とを比較する。これもまた無標アスペクト形式が「動的継続」・「静的持続」を表す解釈と「限界性」を表す解釈とを比較し、それらと併せて論じることとなる。

(4)言語学的意味論のみならず文学理論や語用論を取り入れた分析を行う。文学理論においても時間観念は論じられており、言語学とも重なり合う部分がある。

### 4. 研究成果

(1)動作性にしろ状態性にしろ、アスペクトは「動詞」の持つカテゴリーであると思われるが、古代や現代諸方言には形容詞にもアスペクトは分化していた(「ありぬべし」「美しかりつる」「寒かりよる」)など。また新しい語法には体言や形容動詞語幹にもアスペクトに近い形態が存在する(「元気でいる」など)。これらのことを、適切に記述する必要がある。

特に「元気でいる」というときの「～でいる」という形式は、単に「一時的状態」というだけでは不備がある(今空腹である時に「空腹でいる」とは言いにくく「空腹だ」という)。現代流行歌の歌詞を調べることにより、「(変化しうるものが)未来に亘って変化せずに継続し続ける」という意味であることがわかった。

またアスペクトそのものの形式も、「～ている」「～つづける」のような「動詞」型だけでなく、体言型をしたものがある。「～始めだ」「～がちだ」「～っぱなしだ」「～中だ」など、体言型をした接尾語的な形式群は夥しいものがあり、これらの位置づけも適切に記述する必要がある。そしてそれらは語構成上「句の包摂」現象を見せており、アスペクト論と語構成論の境界領域に位置する。即ち、「雨が降る」ならば動詞述語文だが、「雨が降りがちだ」ならば名詞述語文のような形をしており、「(雨が降り)がちだ」なのか「雨が(降りがちだ)」なのかといった単語分けの問題も関わっている。つまり統語上の機能と語形とが一致していない。またこれらは非アスペクト形式がアスペクト形式へと変化する途上、過渡期的段階を表しているとも考えられる。

(2)「アスペクトからテンスへ」という歴史的变化の方向性は多くの言語に見られるが、それらは主に「完了形から過去形へ」という変化であった。同様のことが「継続形から未来形へ」という方向として見られるかどうかははっきりしない。しかし英語の「be-ing」が「現在進行」でもあり「近接未来」の意味も表し、特に「be going to」形において未来形となっていることと合わせ、日本語の場

合も同様のことが言えることを示した。既に指摘されているとおり古代語の動的な動詞において、アスペクト無標形は「現在の継続」を表す例が少なからず存在するが、現代語の同じ形式はむしろ「未来」を表すとされている。これを「継続形から未来形へ」という変化の方向として一般化できる可能性を示した。

(3) これまでの日本語アスペクト研究において、理論的に種々の問題があることが明らかになった。即ち、「物語時」「表現時」という理論の不十分なこと。「虚構」のテキストの取り扱いに関する理論の不十分なことである。

1 について。虚構の物語テキストを分析するに当たり、「表現時」「物語時」といった区別が提唱されている。これはキとケリの意味の違いを明らかにするのにも使える理論であるとされる。しかしそこで説明されている「表現時」とは、ジュネットのいう「物語言説」(récit)の時間とは対応せず、「物語内容」(histoire)と直に接続してしまっており、「物語言説」と「物語内容」の区別が必要とされる理論に対し不備なものであることを指摘した。そして、キ・ケリを記述するためには最低3種類の時間が必要であることを述べた。

2 については、これまで漠然と「虚構」の語り手と呼ばれてきたものについて、「仮託」と「扮装」の区別を提唱した。物語が存在するためには、少なくとも「作家」と「作者」と「語り手」という概念は区別されなければならないが、「虚構」とは、「作家」が何らかの点で「語り手」とは別人格の存在であると解することができる。その際、「作家」は別の「作者」に「仮託」することがある。例えば男性作家が女性名のペンネームを持つ場合がある。「作者」が別の「語り手」に「扮装」しただけなら「仮託」したことに必ずしもならない。従って両者を一口に「虚構」の言説と言ってしまうとその性質の違いが不明瞭であり、これらを区別して物語の分析を精緻化する必要がある。

この種の混乱の背景には、「作家」にとって「虚構」の言説であっても、「語り手」にとっては決して「虚構」ではないということが、学者の間で共通理解になっていないという事情がある。言語哲学も含めた理論の整備が必要である。

(4) 言語研究において、韻文資料についての扱いが不十分なことがわかった。もっとも古代語研究で和歌資料はよく用いられているが、中世以降は少なくとも中心的資料として位置づけられておらず、もっぱら散文資料に偏っている。しかし韻文資料は散文とは違った特異な発達の経過をしていることがわかった。例えば現代詩歌において「～てゆく」という表記は散文同様「～ていく」に比べてきわめて稀だが、流行歌の歌詞においては思いのほか「～てゆく」が多用されている(な

お実際の歌唱では[teiku]と発音されているものもある)。このように、全体に口語的な歌詞であっても古い文語的な表記が見られるのであり、このことは、詩歌や歌詞が単に「文語」「口語」あるいは「話し言葉的」といった既存の用語で済ますことのできない資料であることを示しており、日本語史上の位置づけの再考が必要とされる。

そのほか小説において2人称小説は、往々にして実験的な、不自然な文章として受け取られやすいが、詩歌・歌詞においてはそれほど違和感なく作られたものがある。小説において「1人称叙述」と「3人称叙述」の対立が論じられるのに加え、「2人称叙述」も加えた文学理論が構想される必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

福沢 将樹、書評井島正博著『中古語過去・完了表現の研究』、日本語の研究、査読無(依頼)、9巻3号、2013、76-83

〔学会発表〕(計 1件)

福沢 将樹、体言型アスペクトに関する諸問題、国立国語研究所共同研究プロジェクト、2013年9月28日

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

なし

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

福沢 将樹 (HUKUZAWA Masaki)

愛知県立大学日本文化学部・准教授  
研究者番号：30336664

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：